

中江藤樹著「鑑草」の刊行経緯

董 航*

Background to the Publication of Nakae Tōju's Kagamigusa

DONG Hang

摘要

本文對《鑑草》的著作目的、命名由來、成書背景以及時期、內容構成等進行考察，並就《鑑草》的出版緣由，在認同賠償《翁問答》版模這一外在原因的同時，指出其內在原因。

藤樹在《鑑草》中提出明德佛性並結合各卷主題展開論述。該書是寫給妹妹及門生的母親姐妹的勸戒書，其影響波及大洲地區婦女。生活在江戸初期的藤樹認識到儒教本質並終生實踐，在這一背景下，他對跨越時空的同志顏茂猷的救世悲願產生共鳴，著述並出版《鑑草》。

Keywords : Nakae Tōju, early Edo period, Meitoku Busshō, Women's Education, Kagamigusa

はじめに

江戸初期の儒者中江藤樹の著した「鑑草」は、明代の勸善思想家顏茂猷¹の『迪吉録』を素材として編訳した女訓書として知られているが、その刊行経緯や思想的背景について、詳細な分析は必ずしも行われていない。本稿ではまず、「鑑草」の著作目的、命名の由来、成立時期や背景、及び内容構成について、先行研究を参考としてつつ検討する。次に、「鑑草」の刊行動機につき、従来指摘されている前著「翁問答」の版木賠償という問題のほかに、より思想史的な観点からの考察を試みたい。

中江藤樹は1608年に近江国（滋賀県）に生まれ、1648年に没した。「藤樹先生年譜」²によれば、藤樹は33歳の時、『王竜溪語録』を入手することにより、陽明学に接した。37歳で『陽明全集』を得たことを契機に、藤樹は従来の朱子学、陽明学、仏教、神道、道教、文学など既存の学問を総合的に運用・展開する集大成の時期に達した。この時期の著作に「鑑草」が挙げられる³。「鑑草」は女子のための和文の教訓書で、孝行・貞節などの徳目に関する応報の説話が中心をなし、大部分は明の顏茂猷著『迪吉録』（詳細は後述する）によるものである。

「鑑草」が陽明学や中国善書を受容した女訓書であるという点については、これまでも指摘⁴がなされており、該書で初めて掲げられた「明德佛性」という独特な核心概念をめぐる分析⁵や、藤樹の宗教観を中心として近世日本における中国善書の流布及びその影響に対する検討⁶を行った研究がある。また、「鑑草」の宗教的傾向について、戦術としての仏教心性論⁷や儒教的修養の立志教育教化説⁸といった考察も行われてきた。

このように、先行研究では「鑑草」について、善書を受容姿勢や宗教性を中心に議論が行われているが、本稿では、そのような内容的検討を前提として、従来の研究では特に注目されてこなかった「鑑草」の刊行事情に焦点を当てて検討してみたい。

キーワード：中江藤樹、江戸初期、明德佛性、女子教育、鑑草

* 平成28年度生 比較社会文化学専攻

「鑑草」の刊行事情を考察する際、藤樹が33～34歳の時に著した「翁問答」との関係性を看過してはならない。藤樹が門人の池田子に与えた慶安元（1648）年3月19日付の書簡「与池田子」⁹で自ら述べるところによれば、「当代世間のまよひをわきまへたる議論をあつめ」、「同志」を「提撕」¹⁰するために「翁問答」を執筆したという。「翁問答」は孝思想に関する論述や俗儒と異端に対する批判が主題であり、最も広く読まれる藤樹の代表作の一つである。しかし、「翁問答改正篇（序）」¹¹に引用される藤樹自身の感想として、「吾此問答を書せし時、今に比すれば学いまだ精到ならず。且聖道の行はれざるをうれひ、末学の弊を救ふに心あり。故に其議論抑揚甚しく、終に圭角の累をまぬかれず。読人吾本意をさとらずんば、却て或は勝心を助けんか。恐は世に益なふして損あらん。吾これを改正せんと欲す。故に今ひろく伝えん事を欲せず」とある。また、「藤夫子行状聞伝」に「然レトモ學日々新ナルニシタガヒ、此問答愈々其心ニカナハズ。改正之志シ有ケレバ、博ク門人ニダニ授ケ玉ハズ。然ルニ癸未ノ年梓人之手ニモレテ既ニ梓ニチリバメシヲ、幸ニ早く知テ是ヲ破リ玉フ」¹²とあるように、藤樹は「翁問答」に心になかない箇所がまだまだあると思い、「改正の志」を示した。そのため、板屋の手に渡った「翁問答」草稿の無断出版を聞いて驚いた藤樹はこれを抑え、版木を破却させたのである。後に、板屋の無益な失費に対する賠償として「まえかどより」あった「鑑草」を授けた。これが「鑑草」の直接の刊行動機として、従来から指摘されてきたものである。注目すべきことに、多数の著作の中で、藤樹が生前に刊行を認めたものは「鑑草」のみである。以上からも「鑑草」は藤樹の「最も自信のある著作」¹³であったことがうかがえよう。

しかし、先に触れた版木破却の時点で既に仕上がった原稿を板屋に授けるとしたら、「翁問答」の代わりとして「孝経啓蒙」の方が「鑑草」より適切ではなかったかと思われる。なぜならば、「孝経啓蒙」こそ、「翁問答」と共に「孝」の思想を論理的に説いた藤樹の大著だからである。では、「鑑草」がこの時に刊行され、藤樹の生前唯一の出版書となった理由をどのように捉えたら良いだろうか。藤樹を「鑑草」刊行に向けて動機づけたものは何だったのだろうか。上述のように、「鑑草」の思想内容については従来から研究が行われているが、なぜ藤樹がこの時に「鑑草」を刊行しようとしたのかということは、もう一つの興味深い問題である。本稿では、「鑑草」の執筆をめぐる状況及び「鑑草」の素材となった『迪吉録』の内容を検討することによって、「鑑草」刊行の動機をより詳細に明らかにしたい。

1 「鑑草」の著作目的

まず「藤夫子行状聞伝」にある「鑑草八巻或人ノ曰、妹ニ書與エ玉フト云ヘリ」¹⁴から「鑑草」は妹のために執筆したものと示される見解がある。また、書簡「与池田子」に「女中方の勸戒」とあることから、「鑑草」は藤樹の女子教育についての考えをまとめた書であるとも言える。さらに、藤樹は女子教育の必要性を痛感しており、門弟の母、姉などにも読むことを勧めている。中川子老母が「鑑草」を読んだことに対して、藤樹は「大慶に存奉」というだけでなく、「今生後生一大事はただ心に御座候」¹⁵と述べ、心を明らかにする重要性を強調した。彼は明德の本心を常に養い育て、心を潔く無意念に守るために「鑑草」を女性に読むように勧めた。地域的女子教育にも活用されたことは「大洲の婦女の輩は各々の家に毎月一回、順番に集会し、春風・鑑草等の書を読む。その名は藤樹講という」¹⁶と「湖学紀聞」にあることから推測できよう。

上記のように、「鑑草」は妹のために書かれたものであるだけでなく、女子教育の必要を痛感した藤樹が門弟の母・姉にも読むことを勧めた女性の勸戒書である。さらに、「鑑草」は大洲地域の婦女にまでその影響を及ぼした。

2 「鑑草」の成立背景

まず、藤樹が生活していた江戸初期、特に中国善書の日本伝来後には、「心」把握を基点として神・儒・仏の三教の一致¹⁷を試みた学者たちがその勸戒例話を採録して、著書を刊行して、民衆を教化することに努めたことが指摘されている。藤樹と「鑑草」も江戸初期における中国善書の受容を示す重要な一例である。

書簡「与池田子」に「迪吉録のぬき書に評判をかきたる書を鑑草と題し」とあるとおり、「鑑草」は主に『迪吉録』から素材を得ている。明版『迪吉録』¹⁸は首巻と「一」、「心」、「普」、「度」、「兆」、「世」、「太」、「平」の題目で

順番づけられる他の八巻から構成されている。「一」巻から「度」巻までの4巻は官鑑で、所謂官僚の行うべき道徳の事例故実を具体的に示したものである。「兆」巻から「平」巻までの4巻は公鑑である。公鑑は孝悌・慈教など家族道徳からはじまり明末の庶民道徳一般に関する事例故実を著したものである。平巻の末尾に、婦女の道徳に関する事例故実を集めた篇として女鑑が附される。「鑑草」という書名に「鑑」の字が用いられているが、それはそこから取ったと推測される¹⁹。

次に、藤樹の生活変遷からその儒教に対する宗教的理解に迫ってみたい。「穎敏・豪邁」な性格を持つ藤樹は、9歳の時、伯耆国米子藩の加藤貞泰侯に仕える祖父の養子となり、文字を習い始め、「能祖父母二孝アリ」と示されているように礼儀を知る。11歳から『大学』を読み、「聖人可學」であると慨嘆し、「志日篤、學日新」と自ら勤勉に「修身」を始める。12歳では、食事の時に「此食ハ誰ガ恩ゾヤ。一二ハ父母ノ恩。ニツニハ祖父ノ恩。三ツニハ君ノ恩」をつらつら思い、「自今以降、常ニコノ恩ヲ思テ忘ルベカラズ」と誓う。「十四歳、祖母卒」、「十五歳、祖父吉長公、卒ス」、「十八歳、本生ノ父吉次公、死ス」とあるように、藤樹は養父母に当たる祖父母や実父の死に相次ぎ遭遇した。20歳の夏、儒礼を用いて祖父の吉長を改葬した²⁰行為から、藤樹の『孝経』受容、すなわち儒礼が藤樹に深刻な影響を与えたことがうかがえる²¹。27歳で、家族の中で唯一この世に残っている母への孝養を理由に、藤樹は脱藩致仕を執行した。帰郷以後、学問に励んでいくうちに、学問上では朱子学的傾向に満足できず、陽明学の影響を受けつつ、藤樹学という独特の学問を形成するに至った。このような経緯から、藤樹は儒者としてその一生を過ごしたと言えよう。特に「孝」という儒家の代表的思想について、「翁問答」において藤樹はそれを親子間の道理にとどまらず「天地神明の本体」と捉え、我々一人一人が「太虚神明の分身」として身を立て道を行うように工夫すれば「神明靈光」に通じるとする。「孝経啓蒙」では、藤樹は儒教徒として「孝」を超越的皇上帝と結合し、徹底的に信仰し明確に意識させようとしており、「誦経威儀」²²にあるように毎朝、『孝経』を拝誦していたのである。

中国の医学書も数多く読破し、自然科学的知識を持って医書を著述した藤樹であったが、以上のように、祖父母や実父の死去、脱藩致仕の経験、学問上の進展、宗教的性格などの要因に突き動かされる中、『廻吉録』に多数存在する輪廻転生を説いた奇怪な説話を抵抗なく受容し女子教育に持ち込んだのである。

3 「鑑草」の内容構成

「鑑草」の序文²³において、「世間の福ひを思ひくらぶるに、身やすく心たのしび、子孫のさかふるを上とす。命のながきを次とす、位たかく富るを下とす。此福ひの種は明德佛性なり。此種をまきて此福ひを造る田地は、人倫日用の交なり」とし、世間に存在する最上の幸福のもとは明德佛性だと冒頭に示されている。また明德佛性の具体的表現を「鑑草」の本文で論じる徳目と関わらせながら、「明德佛性をつねに明かにして、何事につきてもふさぶらず、いからず、かたくなならず、ひずかしからず、親につかへては孝行の誠をつくし、夫につかへては順従の道を守り、子をそだつるには正しき道にしたがひ、夫の兄弟一族には其程々にしたがひてこんせつにあいしらひ、家内の僕にはねんごろに情ふかく、こつじき非人に至るまで慈悲をほどこすを、明德佛性の修行とす」と述べている。

即ち、「孝は孝行なり、逆は不孝なり」(「鑑草」巻之一孝逆之報)²⁴とあるように、「親につかへては、孝行の誠をつくし」は孝逆之報である。「夫につかへては、順従の道を守り」とは守節背夫報と不嫉妬毒報を指し示す。「不嫉は守節の善行なるゆへに、かならずめでたき報ひあり」に対して、「妬毒は背夫の悪逆なれば、かならず浅ましくおそろしきむくひあり」(「鑑草」巻之三不嫉妬毒報)²⁵というように、両徳目について応報の事例が示される。「子をそだつるには、正しき道にしたがひ」は教子報と慈残報、教子報は「我子」を、慈残報は「継子」を対象にした徳目である。「家内の僕には、ねんごろに、情ふかく」は主に「奴婢雑人」に接する時の徳目仁虐報である。「夫の兄弟一族には、其程々にしたがひて、こんせつに、あいしらひ」は淑睦報である。廉貪報において、藤樹は「食るは得に似たる損なり、廉は損に似たる得なり」(「鑑草」巻之六(二)廉貪報)²⁶と陰陽の発散・収斂から論じ、万物一体の仁を本として財宝に対処すべきだと述べる。

以上のように、藤樹は親族共同体における女人の道徳を説いた²⁷「鑑草」において、序文で明德佛性という造語を示し、本来あるべき正しい心、即ち本心を明らかにする修行として、8つの徳目を挙げて展開し各々の意味

について説明している。

4 「鑑草」の刊行動機

前述したように、「翁問答」の版木破却による板屋の損失賠償として藤樹は「鑑草」を刊行に送り出した。ただし、「翁問答」は仏教を否定しているが、僅か2、3年後の「鑑草」には、「翁問答」に見える「釈尊妙覺の位は大唐の狂者の位」²⁸という仏教否定は全く見られない。「翁問答」では、「見性成道の心の位」として聖賢の心から狂者・狷者・凡夫の心に至るまで分類が行われている。藤樹は「真儒の心学」を徹底すれば「大覚明悟の位」に至るとしており、釈迦・達磨などを狂者と名づけ、「中より下の人の心の位」と位置付けている。それに対して「鑑草」卷之二守節背夫報で「慈悲清浄の心を儒家には仁徳と名づけ、佛法には佛性と号す。房氏その夫を愛して節を守り、姑に孝行を尽し、その子を愛するに道あるは、みな慈悲心の明かなる故なり。其身のかたわなる事をもとめ、身のきずつきいたむ事をかへり見ず、一生楽事にあずからず、心を尽し力を勞する事皆夫のためにして、欲心のけがれ露もなければ、是清浄の本然なり。此慈悲清浄の仁徳佛性は百福の根本なれば、その子の才徳官位の福をつくり出せり。現世のむくひかくのごとくなれば、冥福も又をしてしるべし」²⁹とあるように、明德・仁徳と佛性が全く同じものであると述べている。

なぜ藤樹は仏教に対する態度を排斥から包容に転換したかということ、その「善をなす人には福をあたへ、あくをなすものには禍をあたへたまふとうけたまはり」(「翁問答」上巻之末)³⁰という素朴な福善禍淫³¹の応報的信仰やこの時期における陽明学との邂逅、母堂や門弟の母・姉、地域の女性たちとの日常生活における接触などが考えられる。

第一に、「都テ善悪ノ応報を信ズル」藤樹は、三世因果応報や福善禍淫を「翁問答」著作時代から主張しており、以後晩年までその姿勢を貫いた。「靈符疑解」に「誠敬を以て(天道を)奉祀すること」を実践すれば「天定の禍災と雖も、亦た変消できる。若し変消が無くとも、必ず身後の幸は有る」³²とあるように、天命を畏敬し、積善に精励恪勤するならば、「身後之幸」即ち余慶が与えられると藤樹は確信する。「鑑草」の至る所に、藤樹は積善を促し女性を救済するという悲願を熱烈に示し、善悪応報を「誠に天地感応の妙理なり」³³として感嘆し、その福善禍淫の信仰を再三表明した。

第二に、藤樹はその短い生涯の晩年に『王竜溪語録』や『陽明全集』に接しており、共鳴したものの、それは藤樹の学説の大枠が固まってからのことであり、陽明の本を読んで自らの考えを確かめた³⁴のである。書簡「与池田子」によれば、藤樹は朱子学を年久しく信じて工夫したが「入徳の効」がおぼつかず「學術に疑出来、憤ひらけ難く」大変煩悶した頃、天道に恵まれ『陽明全集』を買い取り熟読した。「『大学古本』を信じ、致知の知を良知と解しめされ候」とあるように、藤樹は「百年已前」に出世した「先覚」の王陽明の考えに同調できたと述べている。すでに「翁問答」で藤樹は、良知と明德を人間の根本原理として同じものとしているが、それをさらに進め、心を明らかにするところに佛性を認めて、そこに今迄の良知と明德とを帰一したのである。藤樹は書簡「答吉田新」³⁵で、「佛家の成仏得脱の勸戒を以て見るにも、吾儒当下安楽の得益を以て見るにも、片時も早く良知に至りたき御事に候」と述べており、仏教の修行を積み重ねることも本心を明らかにするためであるとしている。また、「藤樹先生事状」³⁶に「母堂は仏学を信じていた。ある日、先生は母堂の為に仏書を講じた。出て諸生に次のように言った。曰く、某頃の日、仏書を見る。仏書の奥義も亦た、悉く儒教の中に含まれている。若し仏教に儒教より優れた意味が別に有れば、之を学んでもよい。仏教も亦た本来の心を明らかにするものに過ぎない。だとすると、何で吾儒全体の教を捨て別に之を求めるのか。(これは)学者が知ると宜しい所である。」³⁷とあることから、仏教を包摂しながら、良知・明德と佛性を「明此心」という点に帰着させた藤樹の態度がうかがえる。

さらに当時の社会背景を考え合わせて見れば、仏教を信仰する藤樹の母のみならず、門弟の母・姉や地域の女性たちにとっても、漢文で日本に伝来される儒教思想より日常生活や慣習の中にまで浸透していた浄土教などの仏教信仰や念仏の方が分かりやすかったことは容易に考えられる。このような極楽浄土や後世仏果だけを追求する女性にとって、現世の日常生活の中にこそ生き甲斐を求め、この世において心を明らかにする努力が必要であることを藤樹は痛感していた。故に、藤樹は三世因果応報や福善禍淫思想が織り込まれた『廻吉録』を翻訳紹介するに際して、当時の日本の社会事情に即して、その主な内容である「官鑑」、「公鑑」を取り入れず、その代わ

りに女子教育思想や家庭倫理問題の視点から「女鑑」だけを受容し、説話集の形式で「鑑草」を執筆したのである。

5 『迪吉録』の著作動機と「鑑草」

それでは、「鑑草」の素材となった『迪吉録』は、本来どのような意図で書かれたのであろうか。本書は茂猷の善書思想及び彼の知識人としての立場を示した著書で、官民間わず有益とされたものであったと評されている³⁸。茂猷は、明末善書文化に関係の深い人物として知られる儒学者であり、1578年に中国の福建漳州に生まれ、1637年に没した。その学問は儒学を基礎としながら、仏・道両教にも関心を示すいわゆる三教兼修である。

『迪吉録』の成立趣旨³⁹は、その前書きに相当する「七辯」、「六祝」、「三破」に記されている⁴⁰。「七辯」は茂猷が因果応報・勧善懲悪に関する仏教・儒教の立場からの論説を7条にまとめたもので、「六祝」は善を实践する行動原則を提示したものである。「三破」において、茂猷は歴史上の事件を例に挙げ、果報観念を信じてはじめて「媚世」、「欺世」、「玩世」という世の中に蔓延している不正な処世態度を根本から改められると指摘した。

ここでは「六祝」を概略的に考察したい。「六祝」は為善の根本義や伝流、増補などの為善の功德を明らかにしたものであり⁴¹、具体的には「信心を起す」、「世に伝え広めることを重んずる」、「増補を願う」、「勤勉に修行を重ねることを求める」、「心を養うことを重んずる」、「為善の決意を堅くし、善行を永く続けることを尊ぶ」を指す⁴²。このうち、「信心を起す」は「六祝」の中心的思想であり、「信心」という用語にその仏教からの影響が見られる。茂猷は、まず善悪応報は常理であること、また超越した外力が人心以外に存在することを信仰すべきであることを主張し、庶民大衆の為善という「公善」を実現させるために、良い因縁を広く結び、善を伝えることが大切であると説いた。

「世に伝え広めることを重んずる」⁴³では、茂猷は善書『迪吉録』並びにその勧善懲悪思想を伝え広げていくという救世の悲願に燃える⁴⁴心情を具体的に述べている。「善を以て徳にすることは恐れ多いため、編集者はその名を載せなくともいい。善を以て利に走ることは宜しくないため、販売者はその利を求めなくともいい。書き記すだけで有難い因縁となるものである。善悪応報は一目瞭然で、内に隠して人に伝え広げないようにすると必ず天罰が下る。この善し悪しは上帝の神聖の道標で冥府の裁判の文書である」という。続いて、『迪吉録』を「伝流」する善報について、「一人に伝えるものは十善、十人に伝えるものは百善、大貴人大豪傑大力量者に伝えるものは千善、刻印伝流して広布無疆なるものは万善、人に説いて下、田夫閨婦牧豎頑童に及べば善縁福縁は無邊である」と説いている。

「増補を願う」⁴⁵では、古今の善悪事例が描かれ、このような事例を補足することの功は甚大であると述べている。茂猷は「自分が偶然に筆記して取り上げる説話だけでは悉く全てを描き切れるとは限らない」と自覚しており、孟子の言葉「正しい道を説いて楊朱と墨翟の邪説を退ける者は、聖人の仲間である」を引用し、「自分と同じく此の意を懐く者がこれを取って各々の書籍に載せ、またこれを得て見聞することを望んでいる」という。「さらに大幅に加筆し、些細なことでも指摘して人の心に反響させてほしい」と願い、『迪吉録』の原文に対する加筆、補足の願望を表している。「賛揚の一言にせよ、打動の一念にせよ、志を同じくする者たちによる増補を積み重ねるほどに、「迪吉逆凶」という神聖の道理がより一層現れて明らかになり、天道に従いその教えを広げる功績はますます厚くなっていく」というのである。

『迪吉録』という書名は『書経』の大禹謨にある「善道に従えば吉事があり、悪道に従えば凶事があるのは、影が形に従い、響きが音に応ずるように確かで明らかなことである」⁴⁶に由来しているとされる。「ここでいう『迪吉逆凶』の道理はすでに大禹によって明らかにされているものの、世間の人は今現在の状況で順逆の応報は現実と違ふことが少なくないと判断し、全くそれを信じようとしない。善をしても必ずしも善い報いがなく悪をしても必ずしも禍を蒙らないと云々する。その心はどのような心であろうか。而もこのようなことを人に語ったりする。その語りはどのような語りであろうか。自分の善種を断つのみならず、人の善根を滅ぼすことが世の中に蔓延している」⁴⁷という考えから、茂猷は世を治めること、すなわち経世出世を第一義とし、儒仏道三教にわたりその道を究め、輪廻転生に関する怪異説話を世に伝え広めるほどの異常な手段を弄してでも常人の迷妄を打破しようとしていた。そのため、『迪吉録』も単に個人的な幸福追求を教えるにとどまらず、世の道や人の心を一新させるための一指標となった⁴⁸と評されるのである。

茂猷と同様に、藤樹も書簡「送中西子」⁴⁹で「福を求め禍を避けることは人情の常である。然れども、人は『廻吉逆凶惟影響』の道理を辨えない。是を以て暴棄に安んじて過ちを改め善に遷することができない。故に感応の妙理を掲出し、これを以て過ちを改め善に遷る機会にする」⁵⁰と述べており、世間一般に「廻吉逆凶」という「妙理」に従い善行を為すよう努力させるといふ救世の営為に情熱を傾けている。

茂猷は「六祝」で「一念の信は一念の善根、念念の信は念念の善根」⁵¹とするように、世のため人のために懇切丁寧に「廻吉逆凶」に従い善行を積み重ね、悪行を戒めることを勧めている。それに対して、藤樹も「良知即善也」という主張から「一念良知に致るを善として、一念道に離るるを悪とす」（書簡「答田辺子」⁵²）を掲げ、日々の暮らしに善悪の合戦が常々あると門人に示している。

このように、三世因果応報や福善禍淫などの問題において、時空を超えた同志⁵³の茂猷と思想的に共鳴を覚えた藤樹であればこそ、『廻吉録』に対して新たな解釈や積極的な借用という「増補」をし、『廻吉録』の節録である「鑑草」を上梓して世に「伝流」させるという実践を遂行しようと努めたと考えられる。即ち、多数の大著を擁しながら「鑑草」だけを板屋に授けた刊行動機には、茂猷の提唱に応えようとした藤樹の救世のための実践という理由があったといえよう。

おわりに

本稿ではまず、先行研究に依拠し、「鑑草」の刊行経緯に関して、その著作目的、命名の由来、成立時期や背景、内容構成に対する考察を行った。これらを踏まえた上で、「鑑草」の刊行には、顔茂猷がその著書『廻吉録』で提唱する「重伝流」「願増補」に自ら応答する藤樹の行動実践という原因があることについて筆者の所見を述べた。なお、排仏否仏の「翁問答」と明德佛性の「鑑草」の一貫性を如何に解釈するかについては、藤樹の一生涯を貫く孝思想からアプローチし、「鑑草」のより深い分析作業を行うことが必要となるが、これは今後の課題としたい。

【註】

- 1 顔茂猷の勸善思想に関して、日本における研究では、酒井忠夫（1969）「顔茂猷の思想について」鎌田先生還暦記念会編『鎌田博士還暦記念歴史学論叢』鎌田先生還暦記念会、荒木見悟（1981）「顔茂猷小論」『明代思想文芸論集：共同研究・共同報告』などが挙げられる。一方中国において、香港城市大学游子安（2005）『善与人同——明清以来の慈善与教化』中華書局の中で、「顔茂猷『廻吉録』与明清官箴」という一節が設けられ論及されているのみで、中国大陸における茂猷の思想研究は空白に近いほど行われてこなかった。このような現状は呉震（2015）『顔茂猷思想研究——17世紀晚明勸善運動の一項個案考察』東方出版社によって打破された。
- 2 「藤樹先生年譜」は、藤樹神社創立協賛会編（1929）『藤樹先生全集』五、藤樹書院（以下『全集』五と略記する）に収められているが、諸伝本（岡田氏本・川田氏本・会津本）に異同があることは、先行研究によって指摘されている。本稿においても藤樹の伝記的記述は上記各伝本によるが、伝本の異同については必ずしも一々注記しない。
- 3 本書の著作年代については、藤樹が36～37歳に執筆したものであることが多くの先行研究により明確になっている。ここでは高橋俊乗（『全集』三297頁）の「鑑草」解題のみを例として挙げる。高橋は書簡「与池田子」の執筆時期と「鑑草」刊行時期から本書を藤樹の40歳以前の著作と判断し、またその思想内容を「翁問答」著作以後のものと考えた上で、「ほぼ先生三十六七歳なるべしと想像せらるるなり」と指摘した。
- 4 中江藤樹著、加藤盛一校註（1939）『鑑草：附春風・陰隲』岩波書店3-32頁。
- 5 高橋俊乗（1942）『中江藤樹』弘文堂107-118頁。
- 6 呉震（2013）「中国善書在近世日本の流衍及其影響：以中江藤樹の宗教観を中心」『白山中国学』（19）1-17頁。
- 7 心山義文（1996）「『鑑草』をめぐる仏教的心性論—戦術としての仏教」『季刊日本思想史』（48）81-110頁。
- 8 高橋文博（1999）「『鑑草』再考」『季刊日本思想史』（54）52-82頁。
- 9 『全集』二440-445頁。引用文内において、入力不可能な旧漢字、旧仮名、記号を入力可能な当用漢字、現代仮名、記号に適宜、置き換える場合もある。以下同じ。
- 10 親切な教授・指導を行うことを意味する。
- 11 『全集』三277-279頁。
- 12 『全集』五90頁。
- 13 木村光徳・牛尾春夫（1994）『中江藤樹・熊沢蕃山』明德出版社112-113頁。

- 14 『全集』五96頁。
- 15 『全集』二530-531頁。
- 16 『全集』五391頁。原文は、「大洲婦女輩。各家毎月一次輪流集会。読春風鑑草等書。名曰藤樹講」。
- 17 大桑齊（1989）『日本近世の思想と仏教』法蔵館を参照。
- 18 内閣文庫の所蔵する『廻吉録』は明崇禎4（1631）年版と清乾隆43（1778）年版という二種類の版本がある。明版は清版より1巻多く首巻があり、そこに著者の知友の顧錫疇、林鈺、祁彪佳の叙、顔茂猷自序、同人の王東里らの評と「七辯」、「六祝」、「三破」という三つの前書き文章等が載っている。本稿は、清乾隆43年版を参考しつつ、明崇禎4年版を底本にするものである。以下は明版『廻吉録』と略記する。
- 19 中江藤樹著、加藤盛一校註（1939）『鑑草：附 春風・陰陽』岩波文庫9-10頁。
- 20 『全集』五32頁。原文は「用儒礼改葬祖父吉長」。
- 21 日本儒教の特徴に関して、高島元洋氏は「儒教の倫理的側面と宗教的側面のうち、日本儒教には宗教の部分がほとんどない。『郊（天を祀る）社（地を祀る）の礼』も『宗廟の礼』もない。儒葬も行われぬ。『孝』や『礼』について倫理的な観念としては理解されていたが、社会構造がことなるゆえに宗教儀礼とは分離して受容された」と指摘している（竹村牧男、高島元洋編著（2013）『仏教と儒教—日本人の心を形成してきたもの—』一般財団法人 放送大学教育振興会159-160頁）。これを踏まえると、藤樹はまさにこのような背景の中で、儒教の宗教的側面を理解・実践しようとしていたと思われる。儒教の宗教的側面や藤樹のそれに対する理解などに関する著述として、加地伸行（2015）『儒教とは何か』（増補版）中央公論新社、同氏（2015）『日本思想史研究：中国思想展開の考究』（加地伸行著作集2）研文出版等が挙げられる。
- 22 中江藤樹著、山井湧ほか校注（1974）『日本思想大系29 中江藤樹』岩波書店183頁。
- 23 『全集』三317頁。
- 24 『全集』三321頁。
- 25 『全集』三381頁。
- 26 『全集』三458頁。
- 27 佐藤正英（2012）『日本倫理想史 増補改訂版』東京大学出版会140-142頁。
- 28 『全集』三218頁。
- 29 『全集』三357頁。
- 30 『全集』三151頁。
- 31 高橋恭寛（2012）「中江藤樹の福善禍淫論再考」『日本思想史学』（44）156-173頁。
- 32 『全集』一150-151頁。原文は、「若能以誠敬而奉祀。則無由生后之行而受禍命者。天定之禍福寿夭。不易免。然有吳二免禍等之事。則能尽奉祀之誠無内外十六景之累。則雖天定之禍災。亦可變消。若無變消。必有身后之幸」。
- 33 『全集』三336頁。
- 34 小島毅（2015）「日本の朱子学・陽明学受容」『東洋学術研究』（175）248-267頁。
- 35 『全集』二431-433頁。
- 36 『全集』五73頁。
- 37 原文は、「先生母堂信佛學。先生一日為之講佛書。出而言諸生。曰某頃日見佛書。其奧旨亦悉包于吾儒教中。彼教若別有好意思。學之亦可也。彼亦不過明此心。則何舍吾儒全體之教而別求之哉。學者所宜知也」。
- 38 酒井忠夫（1999）『増補中国善書の研究 上』国書刊行会474-478頁。
- 39 呉震（2016）『明末清初勸善運動思想研究』（修訂版）上海人民出版社を参照。該書は2009年9月、台湾大学出版中心によって出版されたものであり、2016年に中国大陸における出版に当たって、2009年版の第五章が削除されたほか、適宜微調整が加わっている。本論文で参照した「晚明時代儒学宗教化傾向：以顔茂猷『廻吉録』為例」という第四章については、両者の間に相違は見られない。
- 40 明版『廻吉録』首巻10-16頁。
- 41 酒井忠夫（1969）「顔茂猷の思想について」鎌田先生還暦記念会編『鎌田博士還暦記念歴史学論叢』鎌田先生還暦記念会、259-273頁。
- 42 原文は「起信心」、「重伝流」、「願増補」、「囑勤修」、「重養心」、「貴堅永」。
- 43 明版『廻吉録』首巻9頁。原文は、「一重傳流、此書善惡兩報、森然指掌、是上帝之神道、冥府之案牘也、官審已備、書吏筆之而已、故輯之者不必有其名、不敢以善為德也、市之者不必求其贏、不宜以善利也、書記所在、即屬善緣、秘而不流、必有天殃。故能以此意傳一人者、當十善。傳十人者、當百善。傳大貴人及大豪傑、大力量者、當一千善。刻印傳流、廣布無疆者、當萬善。時時稱說、時時提掇、令人耳而目之、下及田夫閭婦、牧豎頑童、無不變化、善緣無邊、福緣亦無邊矣、昔孫思邈刊醫書千金方書成、平地仙去、周旒為人說太上感應篇、脫饑饉死籍、繇此言之、公善之德、豈有量哉。」。
- 44 荒木見悟（1981）「顔茂猷小論」『明代思想文芸論集：共同研究・共同報告』97-116頁。
- 45 明版『廻吉録』首巻9頁。原文は、「一願増補、發揮古今善惡酬報者何限。偶筆記取、安能悉其大全、同懷此意者、或取之載籍、或得之聞見、不妨續入、更加大筆、挑剔微危、躍人心目、一句讚揚、便是一句護持善根、一念打動、便是念消弭罪業、發愈朗、神理愈現、

助天闡教，為功厚矣，孟子有云，能言距楊墨者，聖人之徒也，愚于此篇亦云。」。

46 原文は、「禹曰、恵迪吉、從逆凶、惟影響」。

47 明版『迪吉録』首巻6頁。原文は、「夫迪吉逆兇，聖人已斷之矣，而世乃指順逆之少爽者，懵然不信，謂為善未必獲報，為惡未必蒙災，是其心為何心哉，且以此而語人，是其語為何語哉，斷自己種子，滅他人善根」。

48 荒木見悟（1981）「顔茂猷小論」『明代思想文芸論集：共同研究・共同報告』97-116頁。

49 『全集』一193-202頁。

50 原文は、「求福避禍。人情之常也。然人不辨迪吉逆凶惟影響底道理。是以安于暴棄。而不能改過遷善。故揭出感応之妙理以作改過遷善之機」。

51 原文は、「一念信便是一念善根、念念信便是念念善根」。

52 『全集』二407-409頁。

53 呉震氏は中江藤樹と顔茂猷との特殊な関係が十分に注目されなかったことを指摘した上で、その関係を「海外同志」という言葉を引用して示している。（呉震（2015）『顔茂猷思想研究——17世紀晩明勸善運動の一項個案考察』東方出版社373-379頁）